

2. 生物多様性ってなんだろう？

2-1 生物多様性とは

私たちは一日として生き物の存在や関与なくしては生きられません。46億年といわれる地球史の中で、38億年をかけて育まれた生物の多様性によって人類が支えられているからです。

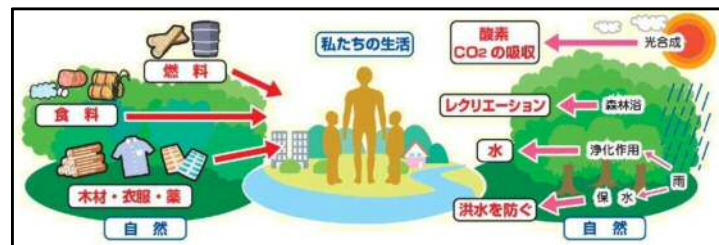
国際条約の「生物の多様性に関する条約」の定義では、「生物多様性とは、全ての生物の間の変異性をいうものとし、種内の多様性、種の多様性及び生態系の多様性を含む」とされています。これは、地域の様々な環境に即した、様々な種類の生き物が、個性をもって存在していることを表しています。

生物多様性とは、地球上の生命の長い歴史と進化、つながりと相互作用の中で生み出されてきたものであり、人間を含む全ての生命は他の様々な生命とつながり、支えあって存在していることを表しています。豊かな生物多様性は、自然の恵みとして人間にとって有用な価値を持ち、安全な飲み水や食料の確保等に寄与し、暮らしを支えるものであるだけでなく、多様な文化を育む源泉となり、地域ごとの固有の財産として必要不可欠なものといえます。



自然の恵み（生態系サービス）

（出典）「わかる！国際情勢 vol46 地球に生きる生命の条約 生物多様性条約と日本の取組」（外務省）より



自然の恵みイメージ図

（出典）パンフレット「かわさき“生き物多様性”」（川崎市）より

2-2 私たちを取り巻く環境とは

川崎市は、多摩川に沿った細長い形状で、約146万人の市民が居住しています。人口は増加傾向が続いており、人口密度は東京区部、大阪市に次いで3番目で、有数の大都市となっています。

川崎市の自然環境は、北西部の丘陵地は八王子から三浦半島まで続く多摩・三浦丘陵の一部になっています。

河岸段丘となる多摩川崖線と多摩川の間は平坦な多摩川低地となり、臨海部には埋立地が広がっています。

海岸線は埋め立てられ、ほとんどが工業用地となっていますが、運河や多摩川河口の広大な水域は、工業地帯に再生された緑を含めて、市域の骨格を形成する重要な自然環境の資源になっています。

多摩川低地には、住宅地や工業用地が、北西部の丘陵地帯には住宅地が広がっている一方で、黒川等の農業振興地域における農地や生田緑地等の樹林地がまとまりとして存在しています。

市域全体では、これまでに数千種におよぶ様々な生き物が確認されていますが、市域に存在している農地や樹林地、河川等を中心に、住宅地、工業用地に再生された緑や水辺などを含めた、人がかかわることで成り立つ様々な自然環境が、市域の多くの生き物を支えています。



2-3 市の考え方

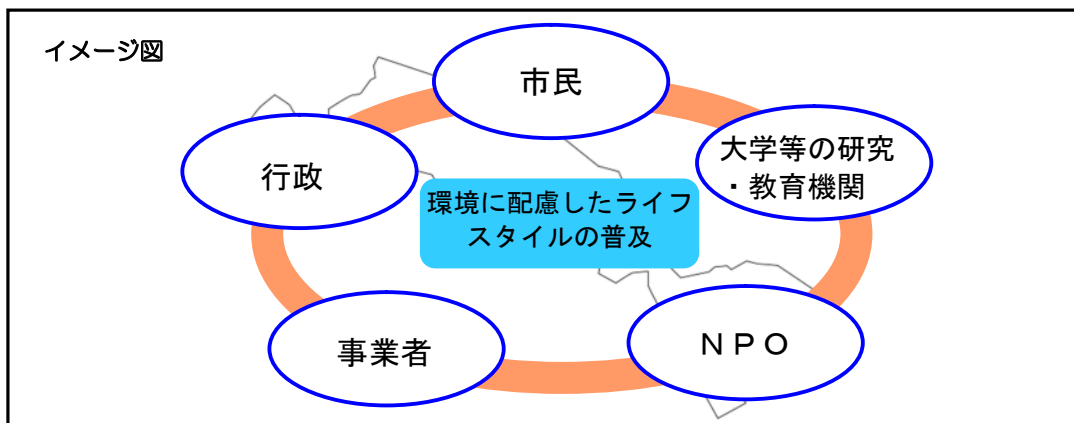
川崎市は、生物多様性かわさき戦略～人と生き物 つながりプラン～において、生物多様性の保全に取り組む背景や地域特性を踏まえて、基本理念と基本方針、さらに戦略で目指す川崎らしい将来の姿として「将来ビジョン」を次のように定めています。

基本理念

「多様な緑と水 人や生き物がつながり 都市と自然が共生するまち かわさき」

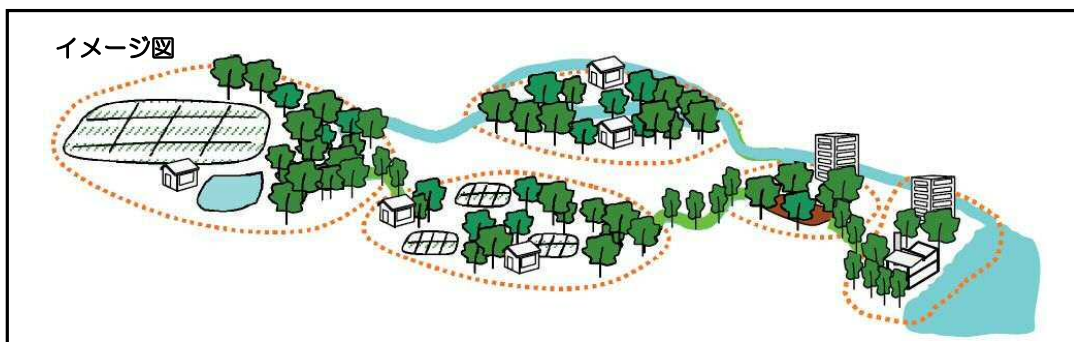
1) 人と生き物をつなげる

川崎市では、市域の多様な緑と水の自然環境を背景に、生物多様性の保全への認識や環境に配慮したライフスタイルを広めることにより、生物多様性に配慮した行動を促進するとともに、保全活動に積極的に取り組む人材を育てていきます。



2) 生き物をつなげる

地域の特性を踏まえて生き物の生息・生育環境となる緑と水をまもるとともに、生き物の視点で緑や水をつなぐことや、まちなかに新たな生息・生育環境を創ることによって、人にも生き物にも住みやすいまちづくりに取り組んでいきます。



3) 情報をつなげる

市民や事業者、行政など多くの主体の協働により生物多様性の保全を推進していくためには、各主体が情報を共有する必要があることから、市域にある自然環境や生き物、様々な活動の情報を集めて、生物多様性の保全と正しい利活用に向けてわかりやすく伝えていきます。



生物多様性かわさき戦略・将来ビジョン

この図は、生物多様性かわさき戦略～人と生き物つながりプラン～において、生物多様性の保全に配慮したまちのイメージを共有するため、戦略期間にとらわれず、長期的な視点を持って描かれたものです。



2-4 取組の考え方（心構え）

私たちは、生物多様性の保全を進めるために、どのようなことから始めれば良いのでしょうか。

1) 生き物の暮らし方

私たちが、普段生活している自宅近くや郊外の緑地、河川敷などには、それぞれの環境に応じて数多くの生き物が暮らしています。

まずは、身近な自然に目を向け、そこにいる生き物を観察して、その生き物がどのような名前か、どのような生活をしているのかを知ることが大切です。

例えば、カエルの仲間は春になると周辺の林から、池などの水辺に集まって卵を産み、卵から孵ったオタマジャクシは水中で成長し、夏になると子ガエルになって上陸した後、成体になるまで林の中で暮らします。

チョウの仲間は、幼虫が食べる植物に卵を産み、幼虫はその植物を食べて育ち、蛹になります。蛹から羽化した成虫は花の蜜や樹液などを吸って暮らします。

生き物は、種やグループによって暮らし方（生態）は様々なのです。

2) 生き物の暮らす環境

生き物の名前と暮らし方を知ると、その生き物が暮らしていくためにはどのような環境が必要なのかがわかります。また、その生き物が暮らしているということは、近くにその環境が残っているということです。

主に、カエルの仲間やトンボの仲間などは水辺と樹林がセットになった環境を、チョウの仲間は食草や食樹が生えている草はらや樹林環境を、バッタの仲間は草はらのある環境などを好んで暮らしています。生物多様性の質を高めるためには、その土地に暮らしている生き物にとって必要な環境を理解しながら活動することが大切です。

3) 活動を広げよう

生物多様性を保全する活動は、市内の様々な場所で行われ、多くの市民、事業者の方々が関わっています。また、このような活動に参加したいと思われている方もたくさんいます。

生き物や活動団体の情報などを、多くの市民の方が共有することにより、活動全体の輪を広げることができます。